



Be Creative !



「真善美聖」を考える

例年の夏以上の酷暑の日々が続いています。皆さん、夏休みをいかがお過ごしですか。

1学期の終業式に鈴木修学先生が本校の校訓にと考えていらっしゃる「真善美聖」に関わり、お話をしましたが、若干、私のスピーチの練習不足もあり、上手に皆さんに思いを伝えられなかったという反省と、「『聖』とは何ぞや」と思いながら生活をしていると、実は「聖なる生き方」は私たちの生活のなかにこんな形で存在をしているのかという気づきもあり、今月号の校長室だよりで取り上げてみることにしました。改めて、1学期終業式の式辞の再録から始めます。

イチローの言葉から「聖」を考えるー1学期終業式の式辞

今日は、インスタで出会ったイチローの言葉を紹介したいと思います。インスタゆえに、すでに多くの人の知るところの言葉なのでしょうが、私は初めて聞きました。心に沁みだ。イチローはこう語ります。

「人より頑張ることなんてできない。あくまでも秤は自分の中にある。自分なりにその秤を使い、自分の限界をみながら、その限界をちょっと超えていくということを繰り返していく。そうするといつの日かこんな自分になっているんだっていう状態になる。少しずつの積み重ねをしていくこと、それでしか、自分を超えていくことはできない。」

本学園の創立者であり、付属高校の初代校長であられた鈴木修学先生は「真善美聖」という言葉を付属高校の校訓にしようと考えていらっしゃったようです。そのことが、先生が遺された文献から読み取れます。最近、私たちは、その言葉の意味や価値についてよく考えます。一見横並びに見えるこの言葉は「真」と「善」の積み重ねの上に「美」が生み出され、その真髄に「聖」が存在をしていると私はとらえています。私にとって、イチローの言葉はここに重なってくるのです。「自分の中にある秤」により自分を鍛える、その中で体得した「自分自身はこうありたい」という美意識が自己の中に形成されることを通して、新たな自分が生み出されていく。その新たな自分自身の有り様を更に追い求め、究める姿勢こそが「聖」の領域と重なるものだと私は考えます。



「聖」と言うと、「穢れのない清らかさ」や「世俗を離れた超人的な精神力や能力」を思い浮かべるかもしれませんが、それは違う。そこには人間であるがゆえに「苦しみや迷い、試行錯誤」が存在し、「聖」とは、必ずそこを潜り抜けて生み出されるものであると私は感じています。イチローの言葉がそれを私に教えてくれます。イチローは続けて言います。「いっきに高みに進もうとすると、今の自分の状態とギャップが

ありすぎて、それは続けられない。地道に進むしかない。進むだけではない。ある時は後退することしかできない時もある。自分がやると決めたことを信じてやっていくしかない。でも、その信じたことは正解とは限らない。間違ったことをやり続けることになるかもしれない。でもそうやって遠回りすることでしか、本当の自分に出会えない、そう、僕は思う。」

「聖」の持つ意味合いは深い。それゆえに大いに語り合い、修学先生がおっしゃるところの「真善美聖」の意味合いを深めていきたいと思います。



★7月18日の新聞記事よりー①大野美子さんの人生観に学ぶ

7月18日の中日新聞の「この人」の欄に紹介されていたのが大野美子さんである。新聞には「精神科の待合室で抱く感情に寄り添う冊子を製作」と紹介がされている。精神科の待合室で患者やその家族はさまざまな感情を抱く。そんな時に読んでほしいと、自分自身の経験を織り込んだ冊子『精神科の待合室でひろくzine』を製作する。関係者の間で静かな評判を呼んでいる冊子である。

哲学を学ぶ修士課程の大学院生だった時に、事件に巻き込まれて体調を崩し、4年間、精神科に入院する体験を持つ。その後、この経験を活かしたいと、精神保健福祉士の資格を取り、保健所や精神保健の現場に携わったが、偏見を恐れて自分の経験を誰にも話せなかったと言う。その後、精神科医だった夫がうつ病で自死する。自分を責めたが、彼女を救ってくれたのは、地域精神医療のつながりであった。彼女は言う。

「人の回復は医療の中だけで起こるわけではない。むしろ、これまで培ったつながりに自分は支えられた。」

現在は博士課程において、患者・遺族・専門職としての自分の経験を基に、精神医療の倫理的課題を研究している。彼女は続けて言う。

「まぶしすぎる希望ではなく、湖に映る月明りくらいの希望を大切にしたい。」

本を通じて他者の言葉を糧にして生きてきたと彼女は言う。「かつての私のような人に言葉を届けたい。」いくつかの苦しみを潜り抜けて、人とのつながりの中で救われ、育てられる自分を感じ取って生きてきた彼女の中に、私は修学先生がおっしゃる「聖」を感じる。「まぶしすぎる希望ではなく、湖に映る月明りくらいの希望」と言う言葉に、懸命にもがきながら生きてきた人間の、静かなれど強い思いを感じ取るのである。

およそ場面は異なるが、魯迅の『故郷』の一節を同時に思い出す。「思うに希望とは、もともとあるものとも言えぬし、ないものとも言えない。」多くの皆さんが中学3年生の時に読んだ小説の一節である。「希望」とは始めからそこにあるものではなく、生み出すものであり、育てていくものであるようだ。

★7月18日の新聞記事よりー②お笑い芸人ティモンディ高岸宏行さんに学ぶ

この人については多くの説明はいらないであろう。「やればできる」このキャッチフレーズを満面の笑みで力説する人である。元高校球児。愛媛県の強豪済美高等学校で白球を追う。当時の上田監督の名言「念ずれば花開く」のもと、自身の夢や目標に向かって、気持ちを強く持ち、厳しい練習を乗り越えてきた。プロを目指して、東洋大学に進学。しかし、大学3年生、大きなけがによりその道を断念。そんな折に出会ったのが、東日本大震災の復興支援をするサンドウィッチマンだ。心打たれたと言う。「笑いで元気を与え、応援する側になりたい」同じ、済美の野球部同期の前田さんとコンビを組む。ティモンディの誕生である。

「やればできる！」この言葉がライブの折に、ふと口をついて出てきたと言う。思い起こせば、母校済美高等学校の校訓だった。彼は、この言葉を言い続けて体現していく。6年前、プロ野球の始球式にコンビで登場した。一度は諦めたプロのマウンドに立つと、感極まり涙。上田監督の教えの通り、念じ続けて花が開いた。現在は、栃木ゴールデンブレーブスでもプレイをし、「芸人・俳優・野球の三刀流」の人と言われる。

彼は、言う。「僕の心の中にあるのは、みんなを応援したい気持ち。僕はずっと『応援の一刀流』でありたい。『やればできる』は、僕の中では、『やれば成長できる』という意味。成功も、失敗もある。でもチャレンジすれば、必ず成長できる。」

彼から学びたいことは「言い続ける・やり続ける」姿勢であり、ぶれない軸を自分の中に持っていることだ。失敗も成功もすべてのことを受け止めて、それでも前に一歩進む、ここに私は「聖」を見出す。